

江戸の厠と屎尿施肥事情

森 田 英 樹

農業における屎尿施肥の記述

ただいまご紹介をいただきました森田でございます。
す。

私、トイレの歴史というのでしょうか、そちらのほうを少しかじっているのですが、特にトイレとかそういうものについて職業的に携わっているというわけではありませんし、まして、今日お話しします農学的なことにしましては、全くの素人でございますので、どこまで正確にお話できるか非常に不安なんですけれども——、最初から何か言い訳がましいことで申し訳ございません。

今日、お手元に私の方からは二種類、資料として

お出ししております。まず冊子になっている「江戸屎尿施肥攷」とプリントの「江戸の厠と屎尿施肥事情」ですが、お手元にございますでしょうか。

それでは、まず冊子の方ですが、「江戸屎尿施肥攷」と書いてございまして、佐藤信淵著「十字號糞培例」現代語訳を通じて、というタイトルとなっております。

最初の一ページ目を開いていただけますでしょうか。ここで書かれているのは農村の施肥、いわゆる屎尿をどのようなかたちで、施肥したかというのをテーマに少しやってみたのですけれども、この屎尿問題につきましては、数々の先行研究がございま

て、たとえば小林茂先生の『日本尿尿問題源流考』

は関西方面を中心とした尿尿の流通経路についてかなり詳しく研究されております。おそらくこれを越える著書というのは出来ないのではないかと思っております。しかし、これは関西方面的を絞っておりますので、やるならば、あと、関東方面での尿尿の流通というのが可能ではないかと思っております。もう一点が、楠本正康氏の『こやしと便所の生活史』と呼ばれるもの、こちらはまさにタイトルの示すとおりでございます。

ただ、残念なことにもどちらも尿尿を有価物として農村が引き取った、というところまでの記述にほとんど終始しておりまして、その先、具体的にそれがどうかたちで使用されていたのか、また、ほかにもいろいろな肥料があったわけですので、尿尿の占めるウエイトがどの程度のものであったのか、ということについてまで触れられていません。

私はそこところがどのようなものなのかかねがね関心を持っております、本をいろいろと探してお

りましたところ『十字號糞培例』とよばれるものと出合ったわけでございます。

二ページ目をご覧ください。まず当時のことを考えるには、様々な農書に当たらなければならないのですが、いろいろ農書を当たってみますと尿尿に関するしは十分な記述がなされていないのが多くの農書のスタイルです。例えば『農稼肥培論』というのがございますが、そこには『尿を肥しに用ふる事ハ、農家能知る処なれば、委しく云はず』と書かれていて、やはり詳しくは書かれていません。また、『培養秘録』には『我曾テ此ヲ書ニ筆センコトヲ欲セシカトモ、此ヲ書ニ著ストキハ、或ハ道ニ明カナラザル士大夫ハ、其事ノ汚穢ナルヲ醜テ此ヲ輕視シ、理ニ暗キ百姓等ハ、其業ノ精密ナルヲ嫌ヒテ』云々と書かれています。つまり、著したところで農村ではもうすでに良く知っていることだ、また、そのようなことを文字にすることのためらいというのでしょうか、役人たちの目にとまると評価が余り良くない、また、あまり詳しく書いてしまうと現場の農

民たちはそれを疎ましく思う、というようなことで農書にはあまり触れられていません。かなりページ数を割いているものもあるのですが、全体からすると尿尿に関しては、やはりかなり少ない記述と言えるのではないかと思います。

比較的手に入りやすい農書としまして、大蔵永常著『農稼肥培論』文政九年（一八二六）、佐藤信淵著『培養秘録』文化一四年（一八一七）、佐藤信淵著『十字號糞培例』文政七年（一八二四）があります。この『十字號糞培例』に関しては『培養秘録』の付録的な扱いを常に受けていました。そのため『培養秘録』に関しては明治になってから、たまたに復刊されていたようですが『十字號糞培例』の方は割愛されているようなケースが何回かあったようです。

その他に、著者不詳の『百姓伝記』元禄年間頃、宮崎安貞著『農業全書』元禄一〇年（一六九七）、村松左衛門著『村松家訓』天保一〇年（一八三九）、このようなものにかなり多くの尿尿施肥に関しての

記述がございました。

ただし、『農稼肥培論』『培養秘録』『十字號糞培例』と『百姓伝記』『村松家訓』とは、かなり大きな違いがございまして、『農稼肥培論』と『培養秘録』はどちらも学者が書いたものであり、農業問題を中心にして考えまして、学術書というスタイルで書き、それをもとにどこかの藩に仕官したいというのでしょうか、そういう目的で書かれたものです。ですから、見方によりますとかなり現場の状況とはずれているものが書かれている可能性があるということとは否定できないのではないかと思います。

『百姓伝記』『村松家訓』の方は現場の農民が書き著わしたものですので、かなり当時の状況がそのままにわかってくるかと思われます。ただし残念なことは尿尿のほかの肥料とのブレンドの具合に關しましての記述は『十字號糞培例』に限られています。他に関してはかなり大雑把な書き方にとどまっています。学者の農書である『十字號糞培例』ですけれども、全く当時を無視しているわけではないと

思われますので、これから『十字號糞培例』に基づいてお話していきたいと思います。

『十字號糞培例』現代語訳

私が調べた限りでは、明治以降に『培養秘録』は現代語にしたものがあるのですが、『十字號糞培例』に関しては現代語に訳したものはございませんので、私が訳してみました。

全部を見てゆきますと大変な分量になりますので、大小便のところだけ、かい摘んで見てみたいと思います。

冊子の四ページ下に「甲字第一番肥養方」というところがございます。

そこに「馬糞三荷、草木灰三荷、獸肉腐汁三荷、酒粕五荷、人糞五荷、雨水三〇荷、以上をよく混ぜ合わせ、大きな桶の中で半月ほど熟して使う。この肥料は痩せ地を肥やし、草木の生気を極めて盛んにするには最も優れている」と書かれています。

こうして見ると、ただ単に人糞が畑に撒かれてい

るのではないということが窺い知れるのではないかと思います。また、『十字號糞培例』に関しては大便に関する記述がいくつかございまして別の書き方をしております。「甲字第三番肥養方」の中に「人糞濃いもの四荷」という書き方をして区別しております。「甲字第四番肥養方」の中でも「濃糞三荷」と区別しています。「濃糞」につきましては、『培養秘録』の記述を基にしてみますと「混ぜり物を取り去った人糞一〇荷と雨水一〇荷を混ぜ合わせ、雨露が入らないようにした肥料小屋で六〇日程かき回し発酵し、真っ青に変色し水のような状態になったもの。しかし半年以上使わないでいると効力が減退してしまう」というものです。つくるのに六〇日程かかるということは、使用するときから逆算をしてつくらなければならない、また半年で効力が無くなってしまふということ、撒く時期を念頭においてつくられていることになります。ということは、尿尿を江戸の町などから運んでくるに当たって、それを必要とする時期が決まってくるということが窺

い知れるわけです。

肥料としての小便

次に、小便についてお話しします。「甲字号第三番水糞方」にはかなり長く興味ある記述がされています。この部分は大蔵永常の『農稼肥培論』と内容が殆ど同じですので、おそらく『十字號糞培例』を書いた佐藤信淵の方が盗用したのではないかと思います。大蔵永常は太分の出身で主に関西地方で活躍した人で、佐藤信淵は秋田出身で関東地方の様々な農村を見て回ったという人です。関東と関西とを対比して比較してみるのも面白いのですが、時間がありませんので、ここでは触れないことにします。

「甲字号第三番水糞方」には小便について『小便一斗、六・七月の小便は、一升で冬の小便三升にあたる。八・九月の小便は一升で冬の小便二升にあたる。そのため、水を加える時はこの事に注意すべきである。雨水五斗、もし雨水が無いときは、沼などの溜水を使用。以上の二種類を混ぜ合わせ、数日置

いた後に使用する』と書かれています。「数日置いた後に」というように、常識的に考えてそうなので、すけれども、小便の場合にはかなり即効性がある、大便のように時間をかけてじっくりと、作るというものではありません。その後に『もし小便だけを草にかけて場合は葉が縮み枯れてしまうことがあり、大便よりも危険である。そのため適量の水を加えて使用すること。加える水量が少ない時は肥料としての効果が有り過ぎてむしろ、害となることがある』と書かれ、小便は効果の強い肥料であると、特に触れております。

話は逸れてしましますが、なかなか興味深いことを知りましたのでご紹介しておきますと、昭和十五年に田中香涯（本名・祐吉）という人が『妖・異・変』という本を書きました。この田中家というのも代々江戸時代からの医者でありまして、これを著した人は明治初期から大正・昭和と生き抜いた人のようですけれども、江戸の医学を学んだ後、西洋医学を学んだ人です。様々な医学関係の変わったことを

書きとどめたもので、当時そこその評判であったもののようです。その中に、小便についての記述が載っております。『一九三一年、シュレル及びゲーベル氏による実験。野菜に女性ホルモンを与えると開花が著しく促進した』この話を受けて伊藤正雄医学博士の研究として『窒素、磷酸、加里のいかなる化学肥料を配合しても婦人の尿の作用には及ばない。又女性ホルモンを含有する婦人の尿を肥料として用いると米の收穫は八〇%増加をみる』とありました。どこまで本当か、嘘かはわかりませんが、でも八〇%の増加というのは並々ならぬものがあります。八%だけでも大変なことだと思ふのですが。

ただ、これも必ずしも眉唾ものと言ひ難い、と思いますのは古代エジプトの風習としまして婦人が自分が妊娠したことを知るのにどのようなかたちでしていたかという、大麦に自分の小便をかけると成長が早くなって来る時期がある、それで妊娠を知った。という記録があります。このように昔の人の英知というのは決して馬鹿にできるものではないと思

います。私も関心のあるところなので、実際に医学的にどの程度の根拠があるのかご存知の方がありませんでしたらお教えいただきたいと思っています。

話を戻しまして、「甲字号第三番水糞方」の続きになります。『蕎麦など実を作る作物には小便の水糞が一番である。茄子・瓜などにはなおさら効果がある。そのため、京都近辺の百姓が小便を貴ぶのは、関東人の比ではない』とあります。関東よりも、明らかに関西の方が小便を必要としていたということが書かれています。これは多くの農書でも見受けられる記述でございます。それから『小便は腹の中で作られる酒の類であるから、これを草木に与えるならば、丁度酒を飲んだ時のように、素早く葉の端まで行き渡ると、皆言っている』というおもしろい記述も続いています。

小便が関西方面で重要視されていたということで、例えば、長屋なんかの場合ですと、大小便をどのように扱ったかということで小便の重要性を垣間見ることが出来るのではないかと思います。江戸

の場合には長屋に後架（共同便所）があったわけですが、そこで農民に渡した大小便の収入は全て大家のもとに行っていました。京都近辺では大便は大家のものであり、小便は店子のものであると分けて考えられていたようです。そのため関西では小便を熱心に集めていたというのも分かるような気がします。

大小便の取引価格

それでは、大小便の価格がどれくらいのもので取引されていたかという問題が次に出てまいります。この点になりますと、先程申し上げました『日本屎尿問題源流考』が非常に詳しく記しております、詳しくはそちらを御覧いただくのがよろしいでしょう。その中には、沢山の表が載っているのですが、ここで御紹介するのは銀で支払われていたのではありません。うかぬであらわされています。時期（季節・年代）によって値段が上下しています。銀ばかりではなく物と交換される場合も極めて多かったわけで、一口

に大小便が幾らだったとは言いきれないようです。参考までによくいろいろな本に例に出されている部分をご紹介しますと、江戸の場合、長屋で大人二十人が居たとすると、一年間に屎尿を売り払った大家の収入が大体一両から一兩二分であった、というのが多く引用されているものです。個人宅の場合には、人数が少なくて違ってくるのですが、江戸では現物交換が多かったようです。天保二年（一八三二）の滝沢馬琴の日記に肥を取りにくる百姓が代わったときのトラブルについて書いているのですが、十五歳以上の成人一人について一年間に大根五十本と茄子五十個で交換することで話がまとまった、と書かれています。

私の素人考えですが、一年間に大人一人に大根五十本、五人家族ですと二百五十本、膨大な量になるわけです。そんなに大根ばかり食べていたのだろうか。そうなると、江戸の八百屋では大根の商品価値が無くなってしまうのではないか、そんな不安が出て来るのですが、馬琴の日記にはそんなふうにか

れています。

値段のこともう一つ申し上げておきますと、値段に五等級あったようです。

最上等品 「勤番」／大名屋敷勤番者のもの

上等品 「辻肥」／市中公衆便所のもの

中等品 「町肥」／ふつう町家のもの

下等品 「タレコミ」／尿の多いもの

最下等品 「囚獄、留置場のもの

とあって、それぞれ取る場所によって取引の相場が変わっていたようです。この等級は、要するに日常の食事内容から区別したもので、肥料価値からいえば正しい取扱といえるのかも知れません。

明治二〇年（一八八七）に東京農林学校（後の東京大学農学部）に來られたケルネル博士が人糞の成分分析を行いました。それによりまずと、窒素分は農家では〇・五五、軍人ですと〇・八〇となつています。磷酸分は農家〇・一二、軍人〇・三〇と確かに軍人のほうが高い数字になっています。

江戸時代に五等級に分けていたというのも、あな

がち、科学的な根拠がないわけではなく、ある種、経験則に基づいて当時の人は知っていたという気がします。

しかし、私は窒素分の〇・五五と〇・八〇では作物の成育にどれほどの差が出てくるのか、目で見えてわかる程度ものなのかといった、科学的数値の知識を持ち合わせておりませんので断言は出来ませんが、確かに数値的には食べ物によって差があって、江戸時代の人達は何らかの形でそれを知っていたと言えることができると思います。

三六種類の肥料

『培養秘録』には三十六種類の肥料が挙げられているのですが、私たちがふつう肥料といっているものと言えば、大小便、それから干鰯、灰の類、それに腐葉土系といったところでしょうか。干鰯は江戸時代になってかなり安く大量に出回った肥料です。ところが『十字號糞培例』には干鰯についての記述が極めて少ないのです。干鰯というのは鰯でして、

料理に「ゴマメ」というのがあります。あれは「田を作る肥料になる」というような意味で「田作り」とも呼ばれています。最初の段階では鰯の水揚げがどんどん増えてきて、それを乾かしてそのまま施肥していたのですが、やがてそれを一度煮て油を取ってから、油を取った鰯を施肥していたようです。その油は菜種油と混合して行灯の灯りとしての需要を賄っていたそうです。

『十字號糞培例』に干鰯についての記述が極めて少ないのは、この筆記年は文政七年（一八二四）ですが、その成立年は干鰯がまだ十分に出回っていなかった時代だったのではないかと、私は解釈しております。

「甲字号第二番肥養方」に「小便糠」というのがあります。これは、米表その他雑穀の粗ぬかを俵に詰め、便所の小便溜か小便を腐熟させている大桶に三ヵ月ほど浸けておき、その後小便を良く切って肥料小屋に積んで置き、少しばかり腐った時に施肥したものです。

「小便灰」というものもありまして、藁の灰やその他草木灰を藁俵に入れ、三、四〇日位便所の小便溜に浸けておき、取り出してすぐに施肥したものです。

ここで思い浮かびますのは、主に東北地方、或いはもう少し広い範囲にあったのかも知れませんが、「灰汁場へあくば」あるいは「小便俵」というものがありました。冬になると雪などで家の外になかなか出られないので、土間の片隅に大きな俵を用意しておきまして、そこへ小便をかけておきました。小便を俵に吸収させて便所の役割を果たしていたわけです。春になるとそれが腐ってくる——大変な臭いだったと思いますが——それを春になって肥料として使う「小便俵」というものがありました。

『十字號糞培例』には、甲字号、乙字号、丙字号、丁字号とか、戌字号、巳字号などと様々あって、それぞれに「第何番何々方」というように人糞や小便ですとか、灰、馬糞、酒粕、堆肥などを、作物に対して、或いは土壌の性質に対してどのような肥料に

して行けば良いのかということ、かなりこと細かく書き著されていますが、とても全部を見てゆく時間がございませんので、ここでは『十字號糞培例』の中で、大便、小便が肥料としてどのように扱われていたか、その一部をみるにとどめておきました。

江戸の便所

江戸と申しましても、江戸の町ではなく江戸時代の全国的な便所がどのような形になっていたかを見て行きたいと思います。

今日の、便所にどういうスタイルがあるかと現代人の我々に問いかけられても答えに困ってしまいます。

「男女別ですか」といわれた場合に、確かに男女別のところもあります。公衆便所は男女別、しかし男女一緒の公衆便所もあります。個人宅は男女別ではない。「東京では水洗便所ですよ」といって一言で片づけてしまつてよいのかというと、まだまだ汲み取りも多数あります。簡易トイレみたいなものも

たくさんあります。電車の中のトイレもあります。様々なところで、様々な形態のものがありまして、「今のトイレは水洗だよ」で済んでしまうかという、つぶさに見てゆきますとなかなか一言では済まされません。

当然江戸時代におきましてもそんなに簡単に済されるものではありません。ここでは、極く代表的なものについてこれからスライドを通して、お話をしに行きたいと思います。

スライド 1 「ゴミ取り人」

便所の前にゴミとりの様子を見ていただきます。



「市中のゴミを集め、燃料、肥料、ゴミにわけると書かれています。」

江戸の町を歩き廻りいろいろなものを集め、それが肥料として使えるものならば売り渡すという、そういうことを職業としていた人が居たようです。

スライド 2 (灰買い)



「灰買い」です。灰もやはり貴重な肥料として使われておりました。江戸の町中の竈から出るたくさ

んの灰を買って歩く人がいました。

スライド 3 (馬糞拾い)



「馬糞拾い」をする人がいました。「四谷新宿馬糞の中にアヤメ咲くとはしおらしや」という、唄があります。アヤメというのは遊女のことを指します。江戸の街道沿いには馬がたくさんいて当然馬糞もたくさんあって、その馬糞を拾って農家に売り渡すのを生業としていた人もいました。

スライド 4 (小便買い)

小便担桶を担いでいます。桶の中に大根を入れて
います。小便と大根を交換するために歩き回って
た人ようです。



『東海道中膝栗毛』に面白い話が載っております。
二人の仲間「ちゅうげん」が、この小便買いと行き
合います。小便をするから大根三本と交換しろと

言います。話はまとまりますが二人の小便の出が思

わしくない。小便買いは量が少ないので大根三本は
払えない二本にしろと言って、もめているところへ
弥次さん喜多さんが通りかかり、じゃあ俺が小便を
してやると言って小便をしたので話が丸く治まった
という話です。これはいかがなものでしょうか。そ
の時の二人分の小便が何ccになるのかわかりません
が、それが大根三本というのはかなり良い値だった
なあとと思うのですが、どんなものでしょう？

スライド 5 (肥担桶)

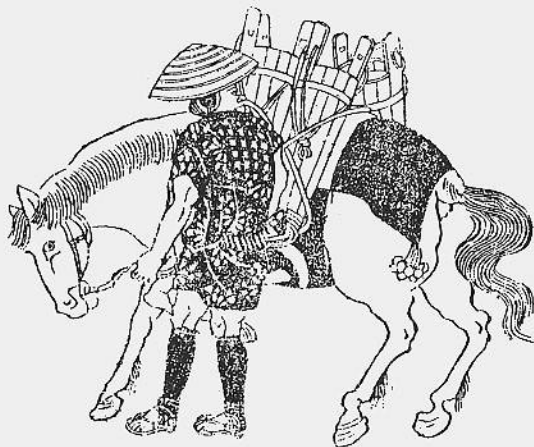


肥ひしゃくと肥担桶です。非常に不思議なことなのですが、多くの農具は地方々々で様々な形に改良されていますが、肥担桶に関しては全国共通で同じスタイルで同じような大きさです。珍しいものと桶の下にコックが付いていまして、それを開けると中身が出てくる、担ぎ歩きながら撒ける状態にあるという改良型もあったようです。

前後の桶でこれを「一荷へいっか」と言っておりましたが、これがどれくらいの量があつて、どのくらいの重さだったのかいろいろと考えてみたのですが、どうもはっきりわかりません。簡単に言いますと「一荷」というのは一人が担げる大きさの単位である」というような書き方をしている辞典ばかりで、何リットリ分とは言えないようです。

スライド 6 (肥運び)

陸上輸送をする場合は馬に桶を二つ積んで運びます。二つで「一駄へいちだ」という単位になります。

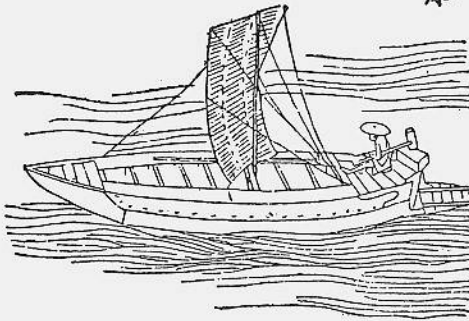


スライド 7 (肥船)

海上輸送のときは「肥船」で運びましたが、二種類ほどあつてスライドの「部切船へきりぶね」と

といわれるものは、船体が幾つかに仕切られていま
す。農閑期にはあまり肥料の需要がありませんから、
そういう時は下から垂れ流しをしてとぼけてしまう。
値段が高いときには尿尿が盗まれることも多かった
ようで、見張りを怠らなかつたというようなことを
書いてある文献もあります。

舟



スライド 8 「絵農書『老農夜話』」



農書のなかにも挿絵をふんだんに入れてつくりあ
げた農書があります。これも残念ながら余り残され
ておりません。祭りですとか収穫の場面、農具の手
入れが描かれているものが殆どで、農村に運ばれた
尿尿はどのような形で施肥されていたのかを描いた
ものはあまり見当たりません。絵の中央に「肥を運
ぶ」と書かれています、この絵も農村を描いたも

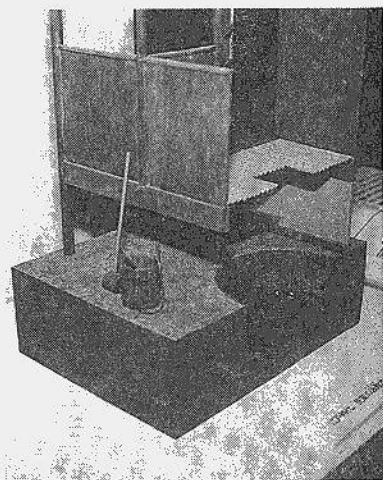
の中にはほんの一部分「肥を運ぶ」姿が描かれているだけです。

スライド 9 「施肥『老農夜話』」



肥びしゃくでかいているところで、「肥やしは一番一番とうつなり」と書かれています。

スライド 10 「汲取便所模型」

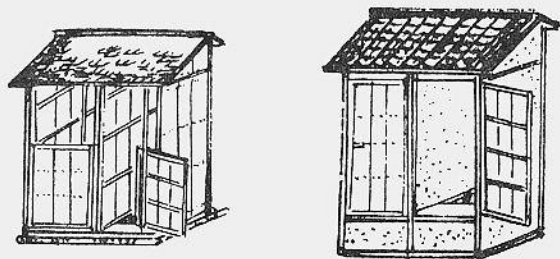


大田区立郷土博物館でつくった汲取便所の模型を写したものです。私自身も使ったことがありませんが、便所の下からくみ取るようになっています。

スライド 11 「江戸・京坂の廁」

江戸末期に書かれた『守貞漫稿』に江戸と京都・

大阪の廁を比較した絵が載っています。



江戸



大阪



大きな特徴としまして、江戸の廁は扉が下半分で、屋根は板葺、壁は板を張ったものです。一方、大阪や京都の廁は扉は全面をおおっていて、屋根は瓦葺、壁は土です。



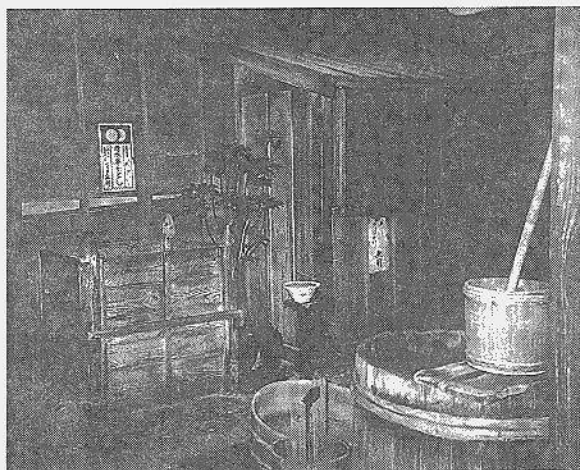
スライド 12 「辻雪隠」

李家正文先生の『廁考（昭和七年・刊）』の表紙を飾った絵で、有名な「上野の雪隠」があります。

これも扉が半分で屋根も壁も木でできてるのがわかります。この原版がなかなか見つからないのですが、『北斎漫画』に北斎が模写したものが載っています。雪隠の扉に貼り紙がありますが、これについては後ほど、ご説明いたします。

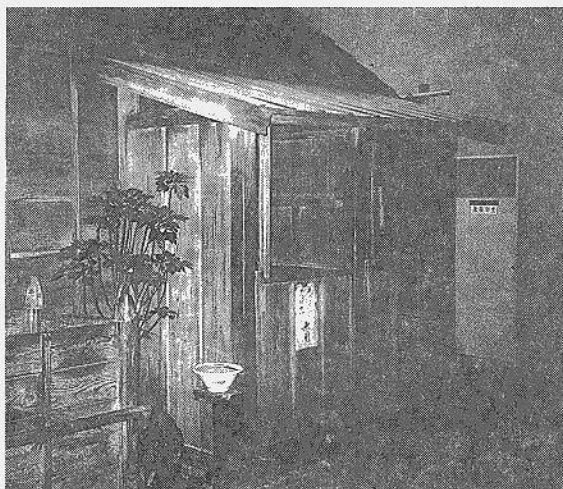
スライド 13 (長屋の廁)

江東区の「深川江戸資料館」に江戸の長屋が再現されています。廁、ごみ溜、井戸の三つが近い位置にあったのが、長屋のスタイルです。廁の扉に貼る紙がされていますが多くの廁に共通する貼り紙です。



スライド 14 (長屋の廁)

廁の出入口の柱のところに蠟燭立てがあります。外には手水鉢が置かれています。



スライド 15 (廁の貼り紙)

貼り紙には「あけはなし たれかけ 無用」と書

かれています。「あけはなし」は扉を開けっ放しにするなどということでしょう。「たれかけ」というのは小便をそこら中に飛散させるなどという注意書きだらけだと思います。



スライド 16 「廁の広告」

「廁にはどこにも同じような広告が貼られています。『月水はおとし 小伝馬町薬種問屋 信濃屋久兵衛』と書かれています。『月水はやおとし（一般

的には『はやながし』）」というのは一種の堕胎薬です。妊娠して止まった月水（月経）を早くながす

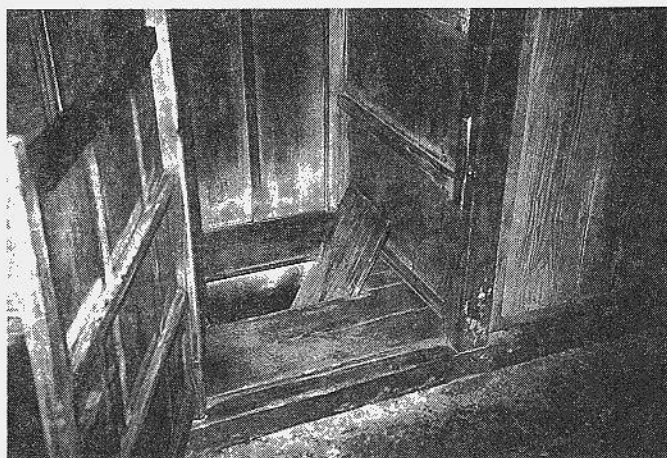


（再開する）という意味合いのものです。江戸の廁に貼られていたもので「朔日丸」という広告もありました。これは避妊薬でして、毎月一日に飲むと避妊できたというのですが、その効果のほどはどうだったのかは全く私には分かりません。

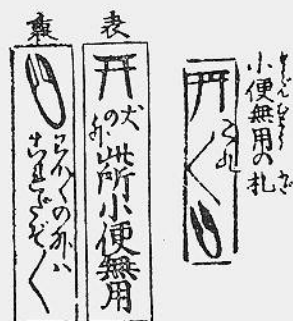
スライド 17 「廁の内部」

長屋の廁には木製の「キンカクシ」がつくられて

いました。ごく普通の厠の簡単なスタイルです。



スライド 18 「小便無用の貼紙」

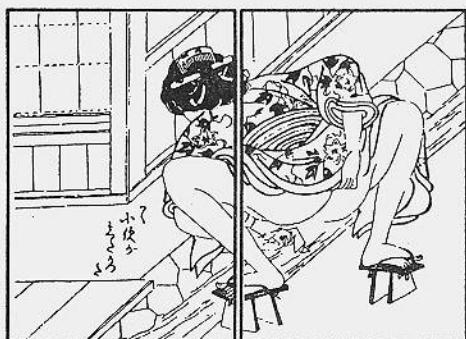


江戸の町の路上には立ち小便を禁止する「小便無用」の貼紙がよく貼られていました。鳥居が描かれています。長屋の厠などでは大小便の区別がされていませんでしたが、江戸の町中には「小便無用」の貼紙が多くみられました。川柳に『江戸では無用京都では担桶を出し』というのがあります。京都なら小便担桶を出しておくところへ、江戸では「小便無用」の貼り紙が出されているということで、江戸では路上で小便をすることが多かったことを窺い知る

ことが出来ます。

記録によりますと農民の側から江戸の街角に小便桶を設置したいと、要望が出されましたが防火、店先に置かれては困る、將軍が通るときに目障りになるという理由で奉行所では却下しています。しかしながら違法状態で小便桶が置かれていた所はかなりあったようです。

スライド 19 「小便のスタイル」



女性が溝に向
かって、しゃ
がんで小便を
しています。
「しゃがんで」
ということに
ついては後ほ
ど触れます。

スライド 20 「廁での小便スタイル」

長屋の廁で小便をしているスタイルです。大小便が分離されていなかったことが分かります。



スライド 21 (大小便分離スタイルの廁)

扉が半分、屋根は板葺き、壁も板です。江戸の廁だと考えられます。小便担桶が大便所と別な所に据えられています。



スライド 22 (大小便分離スタイルの廁)

京都・大阪では小便担桶と大便所とが別な所にあるスタイルが多かったようです。関西でこういうスタイルが多かったのは、先に述べましたように、小便の商品的価値が高かったことと、伝説で伝教大師が京の町に法華經を九万巻埋めたといわれているの



で道端に小便をしておそれ多いという信仰もあったようです。

スライド 23 (女性の立小便)

江戸では女性はしゃがんで小便をしますが、京都では女性も立小便をするのが多かったようです。

川柳にも『京女立ってたれるが少しきず』というのがあります。馬琴の日記にも京都の女は何人も連れだって立小便をしていて、恥ずかしい様子もないとびっくりした記述がされています。江戸の町では

女性が立小便することは少なかったのでしょうか、各地の町史などを見ますと関東一帯となるとかなりの多くの町々村々で立小便の風習があったようです。



川柳に『小便を坐ってしろと女衞言い』というのがあります。女衞というのは遊女にするために女性を買ってあるく者をいいます。「坐ってしろ」と言うのは立小便をするからなので、このことから関東

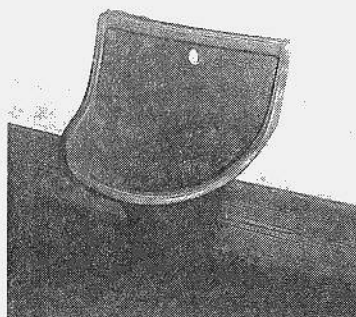
一帯では立小便をする風習があったことが知れます。
スライド 24 「女性の立小便」

前屈みになって立小便をしている写真です。小便をする先が小さくて難しいと思うのですが、コーネル大学のアレキサンダー・キラ教授は「ザ・バスルーム」という本の中でしゃがんでするよりも立って骨盤を前あるいは後へ突き出した形でする方が放尿先を正確にできると書いております。ですから、小さな穴でもその下にある肥壺に小便を溜めることも可能だったのではないかと思います。



スライド 25 「小便秘器／日本民家園」

朝顔形の小便秘器で信楽焼です。信楽では朝顔の口の部分の大きさによって、大広、中広、子広、孫広という四種類を作っておりまして。数年前に年間二百基ほど作っているということでしたから、現在も作られていることでしょう。写真は中広といわれるものです。これは関西地方の女性立小便兼用便器として作られたものです。



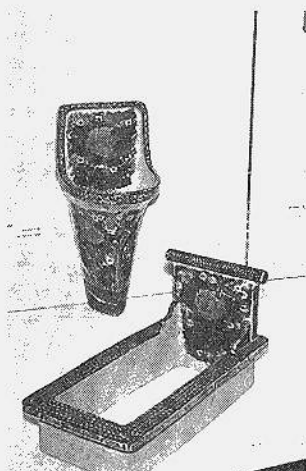
スライド 26 「小便秘器の形」

筒上になった一部が削られた形になった向高とい

われる小便秘器です。このスタイルのものは今でも日本料理屋などで見かけることがあります。

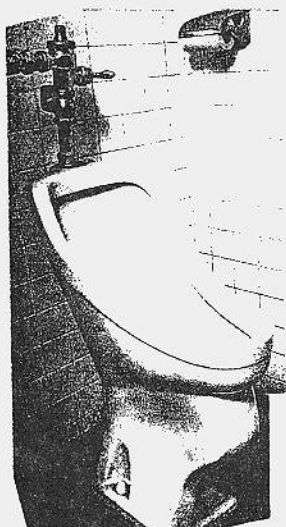


スライド 27 「大便秘器の形」



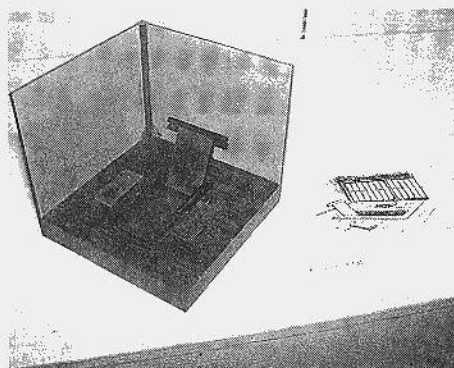
陶器製の便器がいつごろから使われたかというのと難しい部分がありますが、天保三年（一八三二）の馬琴の日記に、長男が昼から夕方までかけて陶器製の小便器を取り付けた、と記されています。このことから江戸末期には陶器製便器が徐々に普及しはじめていたことが窺い知れます。陶器製以外のものは桶などだったのでしょう。陶器製便器が爆発的に盛んになったのは明治になってからの濃尾大地震以降の建設ラッシュになってからのようです。

スライド 28 「女性用立小便器／国立競技場」



TOTOが作った「サニスタンド」という女性用立小便器です。現在国立競技場に一基残っているのが、現存する最後のものだそうです。

スライド 29 「明治期のトイレ」



大田区郷土博物館が模型にしたものですが、もとなっているのは、明治の始めに帝大に招かれてきた大森貝塚を発見したことで有名な、エドワード・モースの「日本その日その日」の中に出てくる挿絵

です。明治の東京の町にはまだ江戸を引きずって残されていたものがあって彼が見たままを描いたのでしょう。

スライド 30 「吉原遊廊の小便所」

吉原の小便所を復元したものです。小便をする所には音消し、臭い消しのために杉の葉が入っていたことが多かったようです。吉原の小便所は二階に作られていました。江戸の町では二階に小便所があるというのは、極々まれに大きな家にあるくらいでした。ですから「二階で小便」というと吉原に行っただけということに暗に仄めかしていたことになります。

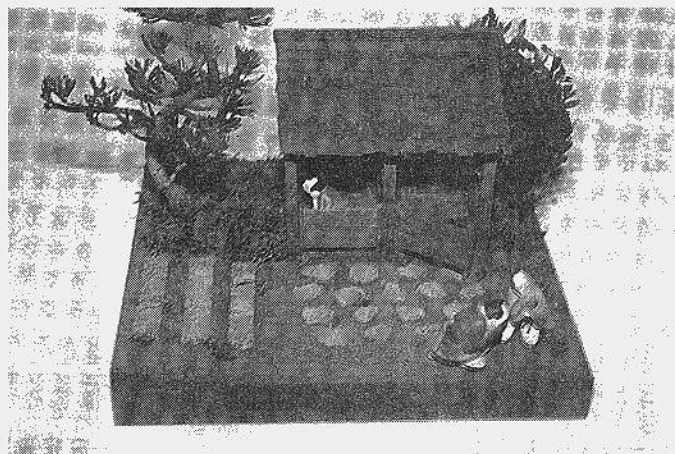
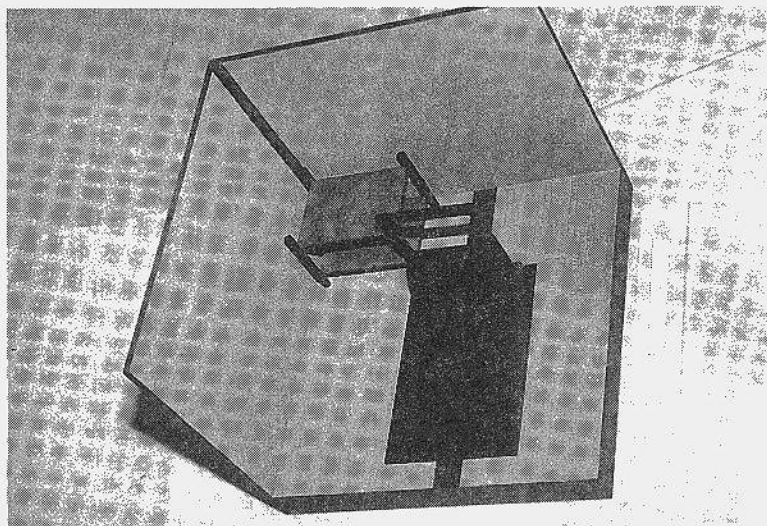
吉原の人口は安政の初め頃（一八五五）で、大体一万八千人、客が二万一千人くらい訪れていたと言いますから、約四万人が吉原というポイントに集中していたことになります。当時の江戸の町の人口の四割ぐらいが集中する過密地帯でした。そこから出る尿の量は膨大なものだったはずで、衛生問題についても大変気をつかう場所でしたから当局はこの尿処理をするに頭を痛めたことだと思います。



ところがこれに対する資料が無いようです。江戸研究の大家である花咲一男先生も吉原の尿尿問題は面白いと考えておられるようですが、やはり吉原の尿尿に関する資料が十分には言われておりません。

スライド 31 「紀州徳川家のトイレ」

畳敷きのところにトイレが据えられていました。有名な話で武田信玄は六畳敷きの広い部屋の中かで用を済ませていたという記述が『甲陽軍鑑』の中に見られます。

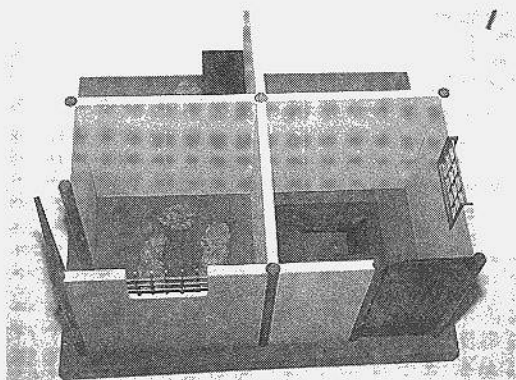


スライド 32 「上野の辻雪隠」

江戸小咄集の『鹿の子餅』の中に面白い話がある
のですが、残念ながら紹介する時間がありません。

スライド 33 (砂雪隠)

茶室の脇には使用することのない砂雪隠がありました。遠くから来た客が最初にしたいことは用を済ませることであろうという、客のもてなしの心を現したのが砂雪隠で、飾り雪隠とも言われました。実際に使用したのは、茶室の一部に設けられた「下腹雪隠」でした。



スライド 34 (沖縄の豚便所)



沖繩には豚便所がありました。「フール」と呼ばれていました。ここに豚を飼っておきまして、人間が用を足した大便を豚が餌として食べ、その豚を人間が食料として食べていたわけです。人間の消化吸収能力というのはかなり低いようで、人間の大便も豚としては十分な食料源になり得るものであったようです。大便は穴から豚のいる所へ落とすような構造になっていました。昭和四七年（一九七二）だったでしょうか、国の重要文化財に指定されました。

現在ではこの中村家のものしか残っていないのではないのでしょうか。GHQの占領政策で大変不衛生なものだとして取り壊しの命令を受けまして、当時の婦人団体なども「そうだそうだ」と言って、みるみるうちに無くなってしまったそうです。

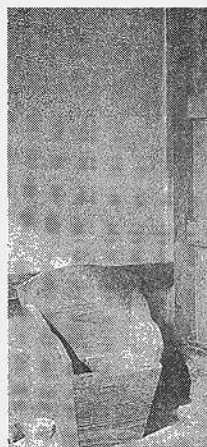
豚は人の大便が温かい状態でないと食べないそうです。

スライド 35 (農家の小便所／日本民家園)

農家の入口に設けられていた小便所です。下には壺が据えられている単純な作りのものです。



スライド 36 (農家の小便所／日本民家園)

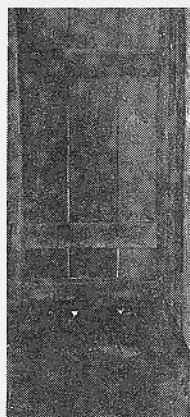


農家の入口にあった木の小便所は門脇便所と言われていました。農家の場合には建物のなかに便所を作らないのが一般的でした。土間の外にありましたから野良仕事から帰ってきて家の中に入らずに用を

足せるようになっていました。

スライド 37 「農家の小便所／日本民家園」

農家の小便所には壺が埋めこまれていました。現在残っているものは陶器製の便器がしつらえてあるものが多く見られます。地方へ行って「古い便所を見せてくれ」というと陶器製の便器があるのを見かけます。陶器製の便器があるのは明治になってからのことで、江戸のころは壺を埋め込んだ上に板をかけたものが多かったのではないかと思われます。



スライド 38 「農家の小便所／日本民家園」

農家では母屋に馬小屋があり、糞を敷いて馬に踏ませて馬の大小便が混じった糞を肥料として使ったようです。その隣に小便所がありました。大便所は母屋から離れた所にあり、大便所兼肥料小屋になっ

ていました。



スライド 39 「農家の大便所／日本民家園」

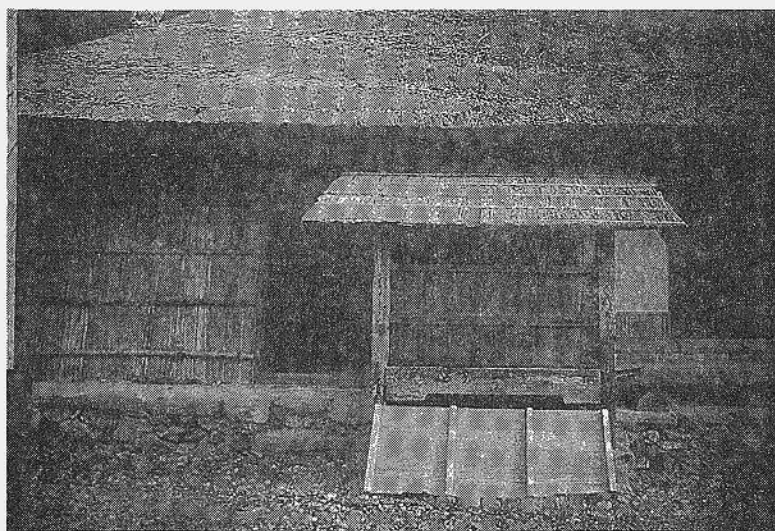
直径約一・五mほどの大きな桶の上に板を二枚渡した簡単なものです。



スライド 40 「農家の小使所」

四国小采へこうね家の小使所です。建物の中央に小使所がしつらえてありますが、民家の再現というのはこういうところを軽視する考えがあって精密な復元をしていません。工事報告書とか修理工事報告書とかを見ていきますと、この小采家の小使所は建物の中央ではなく、元はもっと脇にあって、その奥に風呂場があり、風呂場の排水と小便を一緒にここで混ぜる構造になっていました。どういうわけか復元移築するときに中央へ持ってきてしまいました。ここにある肥桶は実に巨大なもので特徴がありますから、それをクローズアップするために中央へ持ってきてしまったのではないかと思います。そんなことをする必要はない気がします。

多くの図面を見ますと農家の入口にあった小使所なんかは記録から抜かれてしまっています。また農家の大便所の多くは離れにあったのですが、それが図面からは消されていて、あったとしてもただ大便所という文字だけが残されているのが一般的な図面



のスタイルです。どうも便所が軽視される傾向が強いような気がしてなりません。

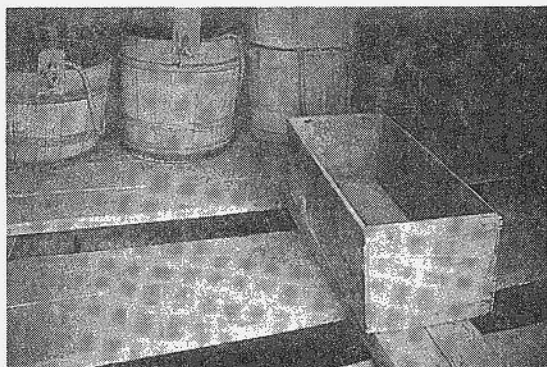
肥桶の直径は一・七mくらいありましようか。かなり大きなものです。先ほど申し上げましたように風呂の排水も入り込みます。山間部のことですから、そんなにたくさん湯が流れ込んだとは思えません。これはあくまで小便所として使われたものです。

大便所はどこにあったかというと、やはり離れの方にありますけれども、工事報告書の中にはちゃんとした形では記載されていないのは非常に残念です。小便所の内部を見ますと簡単な穴が開いていてましてその下に肥桶があるというスタイルです。

スライド 41 「農家の便所／飛驒民家」

飛驒白川郷の合掌造りの遠山家のものです。便所は家の外にあります。大家族を形成していたのですが、大正時代の国勢調査によりますと三十一名という記録が残っています。昭和の二〇年代には二十数名に減っていますが、ピーク時には五十名前後の大家族集団をここで形成していたと思われます。

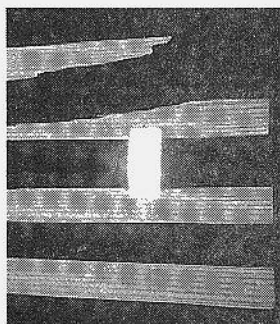
便所の内部には直径二・一m、深一・五mという巨大な瓶が埋め込まれています。この大きな瓶が二基据えられていました。これは便所が男女別になっていたのか、大便所と小便所に分けていたのが、大家族ですから二つ必要だったのか良く分かりませんが、巨大な肥瓶が便所の中に二つありました。



スライド 42 〔籌木〕

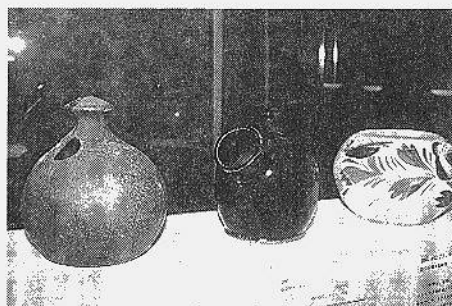
籌木（へちゅうぎ）が箱に入っています。いまではトイレットペーパーを使いますが、昔は木のへらである籌木ですとか藁などを使うのが一般的でした。

こんなもので拭いたら痛いのではないかと思いますが、それは現代人の感覚でして、大便秘現代人のものとは大分違っていたようです。現代人は回りに水がふんだんにありますので、水をがぶがぶ飲むため便が軟らかくなっています。昔は水を汲んで来なければなりませんから、水の摂取量も少なくそれだけ便も固かったので、籌木で十分用が足せたと言われております。



スライド 43 〔尿瓶〕

農家なんかですと便所が屋外にありました。長屋でも家の中には便所はなく共同便所が屋外にありました。そのため特に夜間などは尿瓶（へしびん）で用を足し、後に便所に捨てていました。現代では病気のときでもないと尿瓶は使いませんが、昔はかなり多く使われたもので、男性用と女性用がありました。



古道具屋で聞きますと、尿瓶だと知っていても、

「水差しだよ、一輪挿しにも使うんだよ」なんて、何とか売りつけようとしています。

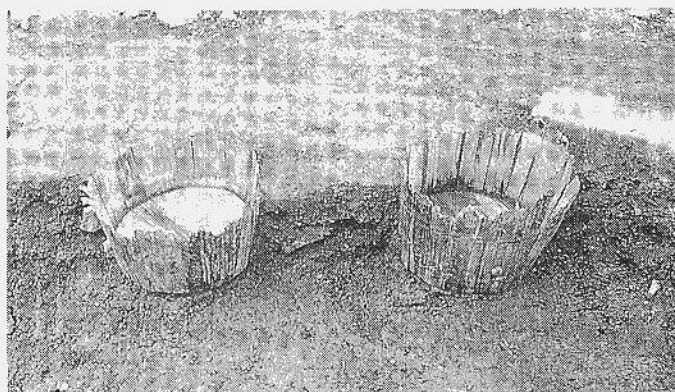
尿瓶には火鉢を小さくしたようなものがありますが、これは数は少ないです。女性用の尿瓶です。サイズに何種類あるのか正確には知りませんが、今までに私が見ましたのは大、中、小の三種類だけです。大きなものですとちよっと小さ目な火鉢くらいで、小便で一杯になるとかなり重くなるのではないかと思います。

スライド 44 「トイレの遺構」

汐留遺跡からトイレの遺構が発掘されて大変な話題になりました。伊達藩の屋敷として使用された跡から大量な便所が発掘されました。肥桶が埋められていた跡の穴が並んでいます。七百基あったそうです。隣屋敷の脇坂家からも肥桶が掘り起こされました。また、江戸城本丸跡からもトイレの遺構が見つかっております。

江戸というと最近ではもう考古学的な分野になってきて、江戸時代の遺構は考古学的な扱いを受けて

おり、これが江戸時代の位置づけのようです。



下水道事業に携わっている方々を前にして申し訳ないのですが、私が思いますのに、江戸時代におい

でも尿尿をとのように扱ってゆくか、どのように処理をしてゆくかということに叡知を築き上げてきました。現在でもコンポストトイレですとか、汚泥をコンポスト化するとかして様々な処理を行っています。これを、不必要なものが出来てしまったからそれをなんとか処理しようという発想だけでは、江戸時代を越える姿勢ではないのではないか、農業百年の計、尿尿処理百年の計というのを考えた場合、やはり現場での姿をいま一度考えてみる必要があるのではないかということを申し上げて結びとさせていただきます。長い時間、ありがとうございました。

《謝辞》 この度、講演の機会を与えて下さいました、日本下水文化研究会運営委員の皆様には厚く御礼申し上げます。

また、同会運営委員の栗田彰氏には本稿作成にあたり、テープ起こしを初めとし万事にわたり御骨折り頂くとともに、貴重な御助言を頂いた。この場を借りて深く感謝申し上げます。

